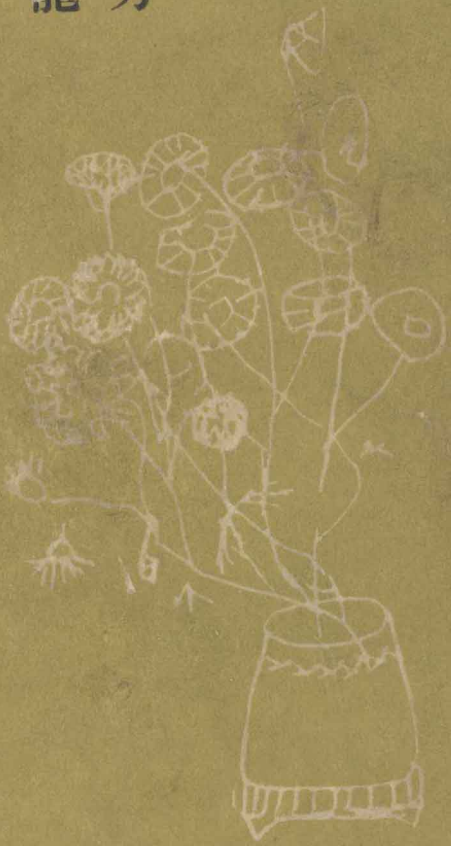
さくらんぼ

永井龍男



くらんは

永井龍男著

新潮社版

さくらんぼ

昭和二十八年十二月二十一日　發行
昭和二十九年十二月三十日　二刷

定價　貳百八拾圓
地方賣價　貳百九拾圓

著者　永井龍男

發行者　佐藤義夫
東京都新宿區矢來町七一

發行所　新潮社
東京都新宿區矢來町七一
電話九段(33)一一一一一一五
振替東京八〇八番

亂丁・落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へ致します。

印刷　大日本印刷株式會社　　製本　京橋加藤製本所
Printed in Japan

目次

頼まれた電報……五
夜のお茶……二三
小さな鉄橋……四〇
新樹……五五
妻のすがた……七二
台風前後……九二
古い枝若い枝……一三〇

小さな椅子……一五八
過失……一七五
シャボン玉……二〇七
言葉……二三六
かた結び……二四
夕潮……二六六

装幀　堀　文子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

さくらんぼ

頼まれた電報

臨時ニュースの、コール・サイン（呼出し信号）に似た音色が、出入口の上の拡声器を、明るく流れ出てしばらくすると、

「みなさま。約五分ほどで、浜松、浜松でございます。到着ホームは、進行方向に向って左側、左側でございます。停車時間は、五分間……」

専務車掌の声で、かんでふくめるように、アナウンスされる。

大阪東京間を八時間で走る、上り特急「はと」が、……といっても、別に早いという訳ではない。むしろ時代おくれで、あの狭いレールの上を、これ以上のスピードで走られては、安心して旅行しかねる位のものだが、この浜松駅附近で、上りと下りの「はと」がすれ違うのを、案外乗客は気づかない。

正確にいえば、その日十二時三十分に、東京駅と大阪駅を同時に発車した「はと」は、浜松から五つ手前の、海にも近く浜名湖にも近い、鷲津という小駅の辺りで、またたく間に右と左にすれ違うのだ。

この季節ならば、誰だって、

「まったく、日が永くなったもんだな」

と、極めて平凡な感慨をもよおしながら、窓の外を眺める時刻だ。大阪を発ってから四時間。とにかく半分だけは、東京へ近付いたのだ。

そこでもここでも、大きく伸びをして席を立ち上る乗客と一しょに、列車はひとゆれして停る。電気機関車に切りかえる、五分間の停車時間を利用して、この駅のホームでラジオ体操をすすめられる。

東京から数えても五つ目、大阪から数えても五つ目の、東海道線の真ン中の停車駅で、ラジオ体操をサービスするために、指導者はすでにスピーカー付きの台の上で、人の集まるのを待っている。

ここでも、三等車のお客は卒直である。

台上の指導者に従って、ワイシャツ一枚の上体から、スムースに体操に入って行くが、遠巻きにした連中のは、どうもはにかみ気味で、型が定らない。

はなはだ気ままなのか、それでなければテレた様子は、二等車の客に相違なかろう。

夕方眼をさました蝙蝠が、羽根をひろげたり、ちぢめたりしているような、中老の人の体操が多いのも一つの特徴には違いないし、婦人の参加者というのは稀れだから、色彩はまことにとぼしい。

ところで、置き忘られたような黒い列車から、ヒラリと、如何にもものなれた様子で、ホームへ降りた若い女がある。

明るいグレーの制服制帽で、すぐこの列車付きのサービス・ガールの一人ということが分る。「はと」ガールと、世間では呼んでいる。

一枚の電報頼信紙へ眼を注ぎ乍ら、伸びのよい脛を、チラリと見せてホームへ降りた訳だが、足早やに二三歩行って立ち止った。

もちろん、客に頼まれてこの駅から打つ電報だが、他人の電報の内容を、盗み見している訳ではない。駅の電信係りに手渡す前に、一応眼を通しておかないと、不備な電文のために、彼女がやり込められる場合がある。

「……おや？」

明らかに、そんな表情が、若い横顔に浮んだと思うと、松前あつ子は頼信紙から眼を離し、制帽の下の広い額を左右に向けて、素早くホームの客達の動きをうかがうようにしてから、クルッと列車の方へ歩を返した。

頼信紙は、もうその時、彼女の上着のポケットへ、無雑作に押し込まれていた。

駅長というものは、見れば見るほど、時代おくれな格好をしているものである。

これだけは、昔の乗り物絵本の中と違いはない。

その駅長がおもむろに、発車のベルにスイッチを入れる。

ホームの客達は、みんなもう一度、背をそらせたり、ズボンの塵りを払ったりし乍ら、ふたたび列車に乗り込む。

五分の間に、カバンが失ったり、上着が見えなくなった様子もない処からすれば、箱師（列車専門のドロ棒）なぞという素ばしっこい連中も、ここでは一応職業意識を捨てて、リクリエーションに加わっていたのかも知れない。

四人のサービス・ガールが、それぞれ受持ちの車のデッキに半身乗り出し、駅員達に笑顔で手を振っているうちに、「はと」はグングン速度を増してくる。

「列車は、浜松を十六時五十分、正規の時刻に発車いたしました。次ぎの停車駅は、静岡、静岡で

ございます。到着時刻は……」

拡声器を通した車掌の言葉は、下手な写真を引き延ばししたように、お国なまりをハッキリ浮き出す。

「お仕度が出来ました。どうぞお越し下さいませ」

白いエプロンの食堂車ガールが、夕食の予約者を、順々に呼びに来る。

左手の浜名湖も、右手の海も今はなく、やや赤みを帯びた夕日の中を、天竜川の鉄橋へさしかかっている。誰でも、一度来てみようと思う景色の一つだ。

食堂車の料理は、お世辞にもうまいとは云えないが、しかし一種不思議な味がある。夏は暑くて、ごめんこうむるとしても、食堂車でなければ、味えない味を持っていることだけは確かで、旅馴れた顔の「はと」の乗客は、またかと云うような難しい顔つきで、中央の食堂車までゾロゾロ通路を並んで行くが、ほんとうは満ざらではないのである。

第一いまどき、あんなにイソイソと、活気のある給仕をして呉れる処は、外にはないと云ってよい。

それにしても、この列車の乗客の、

「おれは旅馴れているんだ」

といったすました顔つきに、だいたい嘘はない。月に何度という風に、東京と京大阪間を往来して、車掌ともサービス・ガールとも顔見知りの客が、沢山乗り込んでいる。

殊に、特別二等車の客にはそれが多い。

社長重役から、平社員にいたるまで、特二の客の殆んどが、官庁や会社の金で切符を買わせる人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

人である。
特別二等車というのは、一口に云えば理髪店の椅子を、通路をはさんで縦に二列ずつ並べたようなものだ。肘かけの下の、ボタンの押しようで、もたせた背中を、立てたり寝かせたり出来る仕掛けが味噌で、アメリカの列車には、床屋も付いていると珍しがる人がこの頃あるが、職人さえ乗り込ませれば、日本でも楽に注文に応じることが出来る。
サービス・ガールの松前あつ子は、受持ち車輛の窓わくに積った油煙を、一通り拭き終った後で、デッキの脇で一息入れている。
この辺の空気は、いつものことながら素晴しくうまいし、それに、電気機関車にかわった気易さもあるのである。
狭い乗務員室へ入り、手早く、クリームで顔を拭きはじめると、同じサービス・ガールの槇波津江が、食堂車を抜けて、上気した顔でこっちへやってきた。
「おひる、たべた？」
やや小柄な体を、動揺に合わせて運びながら、槇波津江はあつ子に呼びかける。
波津江が小柄なのではなく、松前あつ子の背が、普通より高く見えるのだ。
「うん。名古屋を出てから……」
「困っちゃった。名古屋で大もめなの」
「どうしたの？」
コンパクトをのぞき込んだまま、あつ子が訊ねる。
あつ子の勤務は、今年で三年になるが、波津江はこの五月に、一本に成ったばかりだ。一本なぞ

という言葉が、こんな処にまだ残って、ちょうほうがられている。
「京都で乗車した時から、一杯機嫌だった四人連れのお客さんが、座席を向き合わせにして、ウィスキーを出して、たいへんな賑やかさなの」
「中年の男二人に、女二人でしょう。知ってるわ」
「あの人達、何者かしら」
「踊りか、唄か、まあお師匠さんていう処ね。女はお茶屋か待合のおかみさんよ。二人とも、座席の上に坐ってたじゃないの」
「踊りのお師匠さんが、洋服着てるかしら」
「大阪、京都、名古屋と、お稽古して廻る時は、みんな洋服よ」
波津江には、なにもかもまだ珍しいらしい。
「通路の、こっち側のお客さんが、難しい顔になっちゃって、とうとう、あたし呼ばれちゃったの。酒を呑んで騒ぐなら、食堂車へ行くように注意しろ。みんなの迷惑だって云うんでしょう？困っちゃったけど、もう少しお静かに……って、四人連れに頼んだわ」
引いた口紅を、上下の唇でなめ合わすと、たちまちあつ子の顔が生きてくる。
「怒ったでしょう？」
と、コンパクトをしまいながら、その顔を波津江に向けた。
「四人とも、関西弁を使って、聞えよがしになんか云ったけど、あたしにはよく分らなかったわ。そのうちに、男二人が眠っちゃって、ホッとしたの。ところがよ、四人連れも、難しい顔の二人連れも、名古屋で降りるのよ」

「二人連れの人は、お役人ね」
「預った荷物を、ホームへ降していると、四対二の大口論なの」
「……」
「降りがけに、四人連れの中の、ふとった年増の女の人ね？　一番後になったあの人のお尻を、難しい顔をした人が、手さげカバンの角で、いやッという程打ったって云うのよ。失礼でしょう。なにが失礼だ、おれは打たん。いや、打った。ホームでたいへんな騒ぎ……。仕方がないから、見ていたわ。駅長さんが、どうしたんだって、あたしに訊くけど、おかしくって説明出来ないじゃないの。そのうちに、発車。助かっちゃった」
　黙って聞いているあつ子は、制服の肩の辺りを払い、その手をポケットへ入れると、さっきの頼信紙にガサリと触れる。多少、くすぐったい気持がわいてくる。
「ああ、いま食べたいのは、ざるそば。一つでいいわ、ツルツルッとね」
　上気した頬を、乗務員室のドアの角にピタリとつけて、波津江がそう云う。
　暇をぬすんでする、不規則な食事に馴れるまで、相当の年期がかかる。往きも帰りも、昼も夜もという、食堂車の脂の匂いが、鼻につかなくなれば一人前である。
「あんたじゃない？　鷲津で紙をまいたの」
「そお。むこうに、中さんが乗っているもんだから」
　中さんというのは、槇波津江と一しょに、五月から一本になったばかりの、仲間の名であろう。
「あれ、よさないと、叱られるわよ。線路をよごすから」
「知ってるの。だけど、ハンケチなんかじゃ、気分が出ないから、派手にやっちゃったの。一度だ

け。もう、よします」

先輩に対して柔順なのは、近頃美徳といってよい。

上りと下りの「はと」がすれ違う時、お互いの列車から顔を出して、サービス・ガール同士が合図するのは毎日の例だが、ハンケチを振る位では気がすまず、今日は波津江が紙吹雪を散らせた。

幾日も逢わない、仲間の乗っている列車は、すれ違う瞬間にそれほど切なさを感じさせる。

四人が一組で、東京駅から下りの「はと」に乗り込み、夜の八時半に大阪へ着くと、それから車内の後片付けをして、その晩は構内の操車場に付属した、青年寮に一泊する。

後片付けが済んだら、夜の道頓堀辺りを散歩するひま位は、あるのかと思うと大間違いで、外出は止められている。

翌朝、上りの「はと」を整備した上で、帰りの勤務に着く訳だが、東京へ戻ってきた晩も、東京駅構内の宿泊所のベッドで眠り、その翌日一日が、はじめて彼女達の自由な時間になる。

四人一組が、第一班から第三班まであり、それが次ぎ次ぎに、順を追って勤務する訳だから、週一回の休日や、生理休暇のそれぞれな取り方で、予備においてある新顔も入ってくるから、四人一組のメンバーは自然に変って行く。

気の合った同士が、いつも一組になる訳もないし、逢いたい仲間と、五六日顔の合わないことも珍しくはない。若い娘たちばかりだから、顔触れ次第で、相当いざこざの起る場合もないことはない。

「ああ……。ざるそば、ざるそば」

と、波津江が足踏みをするのを、あつ子はにらんで、

「なにさ。おばかちゃん」
「だって、おなか空いているのに、ざるそばより他に、なんにも食べたくないんだもの」
しかし、二人のサービス・ガールは、のんびりそんな話をしていた訳ではない。
雀がさえずるように、彼女達の言葉は早かったし、食堂車へ出入りする乗客達が、半分開いた乗務員室のドアの外を、始終通っていた。
十一輌編成の前部四輌が特三。あつ子の受持ちが、前から数えて六番目の六号車。七番目が食堂車で、その次ぎの八号車が波津江の受持ちである。
つまり、特二は五号車から始まって、十号車まで。最後部についているのが、一等の展望車という訳だが、この一等車のサービスは、白い服を着た年配のボーイが専ら勤める。
さすが一等車の客になると、なかなか食堂車へ足を運ぶような軽卒な振舞いはしないらしく、いちいちこの白服が、しかつめらしく、盆にのせたものを座席へ届けるが、見方に依れば、一等のお客さまには、うっかり若い娘をサービスには出せませんと、無言で語っているように、解釈出来ないこともない。
「あっちゃん！　呼んでるわよ、お客さんが」
食堂車づきの女の子が、予約客を誘いに行った帰りがけに、そう云って通る。
「いそがしい？」
と、それを追って波津江も受持ちの車へ戻って行く。
「いうだけ野暮……」
（食堂車と、車内のお土産売りの女の子達は、直接国鉄に属していない。）

あつ子は、制帽のかぶり具合をなおして、受持ちの六号車のドアを引いた。
食事に立った客の、空席が眼立ち、そこここで夕刊を展げていた。
「静岡で、わさび漬をたのむ。小さい方を五つだ」
呼んでいたというのは、たぶんこの客であろう。馴染みのある顔である。
「君。この間、週刊雑誌に写真が出ていたじゃないか」
「はあ……」
さし出された札を受取り、あつ子はちょっと笑顔になる。
「働く女性」というグラフ頁に、スナップがのっていたのだ。
その辺の客の眼の、こちらへ注がれる中を、一礼して通路を進む。車の三分の二ほど行った処で、ちょっと腰をかがめ、
「あの、さきほどの電報でございますけど」
と、右側の夕刊に隠れた客へ声をかける。
その隣りは空席で、存分に新聞をひろげていたのが、両手がガサリと音をさせると、三十四五と見える精力的な男が、あつ子を見上げていた。
洗い立てのワイシャツの、胸のポケットに、脱ったネクタイがさしこんであり、胸幅も広かった。
「さきほどの、電報でございますが……」
「うん」
隣りの空席の方へ、少し腰をずらせると、煙草でも取り出すような構えで、上眼づかいにあつ子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.